

[シンポジウム] 「歴史語用論：その可能性と課題」

日本（語）への発信・日本（語）からの発信

金 水 敏

2005年12月10日、語用論学会第8回大会（於京都大学・吉田南キャンパス）において、シンポジウム「歴史語用論：その可能性と課題」が行われた。プログラムは下記の通りである。

司会 金水敏 （大阪大学）

1. 「歴史語用論の成立と射程」講師 小野寺典子（青山学院大学）
2. 「初期近代英語における文法化：歴史語用論の観点から」講師 福元広二（鳥取大学）
3. 「日本語史研究と文法化：敬語史の場合」講師 森山由紀子（同志社女子大学）

本誌には、この3人の講師が、それぞれの発表をもとに書き下ろした論文を収録している。

この企画の直接の契機は、講師の一人である小野寺典子氏の新著（Onodera 2004）が出版されたことにある。小野寺氏は、歴史語用論の研究史において画期をなす論文集 Jucker (1995) にも、たった一人の日本人研究者として執筆しており、この分野では草分け的存在であるのみならず、日本（語）からの情報発信者としても貴重な存在である。氏のご著書の刊行を契機として、さらに歴史語用論が日本の研究現場においても一層の発展を得ることを願い、我々はこのシンポジウムを企画した。

講師各位の論文の概要は以下の通りである。小野寺氏は、歴史言語学の研究史と現状をレポートし、併せて、日本語の「な」「ね」系文末助詞・感動詞の歴史的発展についての氏のご研究を紹介している。福元氏は、コーパス言語学と歴史語用論の関わりについてレビューしたのち、やはりご自身の研究成果である I say の歴史的変遷について述べられている。森山氏は、日本の国語史研究の立場から、「はべり」の丁寧語化の問題を取り扱い、これが主観化のプロセスの一つであることを論証している。

このシンポジウムにおける我々の狙いは、シンポジウムのタイトルや、各発表論文の内容に十分表れていることと思う。しかしここで改めて強調しておきたいことのひとつに、欧米の文脈で進められてきた歴史語用論の研究史に、日本語研究を会わせるといふ点がある。小野寺論文で強調されているように、現在の歴史語用論の対象言語は、圧倒的に印欧語族の

言語が多数を占めている。小野寺氏が日本語のデータによってこの分野に貢献していることはすでに述べたが、しかし日本語の歴史的研究には、さらに歴史語用論に大きな発展をももたらすであろうパワーが、まだまだ秘められているのである。

日本語が歴史言語学に貢献するための利点として、次のような事柄が挙げられる。一つは、印欧語族や中国語ほどではないが、歴史的文献資料が大きなとぎれなく、2400年以上も続いている点である。もう一つは、伝統的な国語史研究が既に100年以上にわたって蓄積されている点である。例えば、日本語史研究のなかで、敬語の史的 연구は大きな比重を占めており、重要な著作が数多く書かれている。本誌所載の森山論文もまた、その膨大な研究史を踏まえたところに成立しているのである。また、移動動詞・授受動詞の歴史的発展、指示詞の歴史的体系変化といった点についても重要な研究がある。加えて、これらの国語史研究が、国文学研究と歩みをともしてきた点は重要である。すなわち、言語の使用場面を重視する歴史語用論学にとって、文献に対する深い理解と正確な読解は最も基本的な作業の前提となるのであるが、国文学研究との連携関係はこの点で多大な貢献をなすわけである。

しかし一方で、日本の国語史研究は、文献読解に力を注ぐ余り、研究の理論化ということにあまり意を用いなかったという弱点がある。海外（特に欧米）に対する、研究発信を怠ってきた点についても、反省の余地がある。むしろこの点において、小野寺氏の研究は貴重な例外であるが、このシンポジウムの最大の狙いもまた、この方面での活性化の促進にあったわけである。

今後も、歴史語用論をめざす多くの人に、国語史研究の蓄積に注目し、汲めども尽きぬ情報を活用していただきたいし、一方国語史・日本語史の研究者には、歴史語用論の理論と方法論から多くを学んでいただきたい。そのためには、一層使いやすい日本語の歴史的文献のコーパスを整備するなど、基礎作業も必要となろう。そのような研究の相互交流の活性化の第一歩として、このシンポジウムが位置づけられるならば、企画者としてこれ以上の喜びはない。

参考文献

- Jucker, A. H. (ed.) 1995. *Historical Pragmatics: Pragmatic Developments in the History of English*. Amsterdam: John Benjamins.
- Onodera, N. O. 2004. *Japanese Discourse Markers: Synchronic and Diachronic Discourse Analysis*. Amsterdam: John Benjamins.